

事項	近年の気象状況から推定した津軽中央地帯における水稲品種「つがるロマン」の移植晩限		
ねらい	<p>近年、水稲の生育期間が高温で経過し、津軽中央地帯を中心に生育・品質が不安定となる年次が多くみられている。</p> <p>このことから、本県で高温登熟による被害を受ける可能性が高い津軽中央地帯の「つがるロマン」を対象として、現在の栽培品種及び気象条件からみた移植晩限を推定したので、その内容を参考に供する。</p>		
指導参考内容	<p>1 移植晩限 近年の気象条件（平成3～22年の20か年）から推定される、津軽中央地帯における「つがるロマン」の移植晩限は、登熟適温の出現割合が高く維持される6月3日である（図1）。なお、移植日が遅くなるに従い高温登熟に遭遇する危険性は低下する。</p> <p>2 根拠 （1）移植日から幼穂形成期までの日数は、移植日が遅くなるに従って短くなるが、現行の移植晩限である5月25日を超える晩植であっても十分な生育量が確保される（図2）。</p> <p>（2）出穂期は、移植日が4～5日遅くなる毎に2日程度遅くなる傾向である（表1）。</p> <p>（3）精玄米重は、登熟気温に対して一定の傾向がみられない（図3）。</p> <p>（4）80%以上の整粒歩合を確保できる登熟気温は19～24℃で、味度値は登熟気温が20～24℃の範囲で高く維持される（図4）。</p>		
期待される効果	<p>1 胴割米や白未熟粒などの高温障害に遭遇するリスクを低減できる。</p> <p>2 圃場間による出穂期の変動幅が大きくなることで、刈取作業の適期を拡大できる。</p>		
利用上の注意事項	<p>1 本情報は、水稲移植栽培の大規模経営で刈取適期幅を拡大する必要がある場合や高温登熟によるリスクを軽減するための作期分散を図る上で活用する。</p> <p>2 移植苗は、中苗及び成苗を用いる。</p> <p>3 栽植株数は、坪当たり70株以上とする。</p>		
問い合わせ先 (電話番号)	農林総合研究所 水稲栽培部 (0172-52-4396)	対象地域	津軽中央地帯
発表文献等	平成21、22年 試験成績概要集（農林総合研究所）		

【根拠となった主要な試験結果】

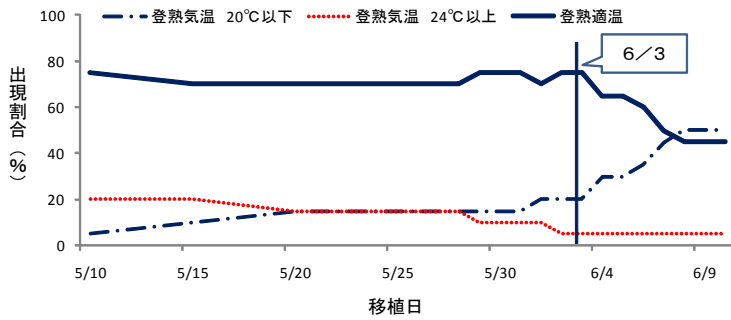


図1 過去20か年（平成3～22年）における黒石アメダスの登熟気温の出現割合

- (注) 1 登熟適温は登熟気温（出穂後40日間のアメダスにおける平均気温）が20℃以上、24℃以下
- 2 弘前アメダス周辺の水田圃場で観測された平均気温は、黒石アメダスで観測された平均気温とほぼ同等である。

表1 過去20か年（平成3～22年）における各移植日に対する出穂期

移植日	5/15	5/20	5/25	5/30	6/3	6/7
出穂期	8/4	8/5	8/8	8/10	8/12	8/15

(注) 出穂期は、水稻生育モデルと黒石アメダスの日平均気温より算出した。

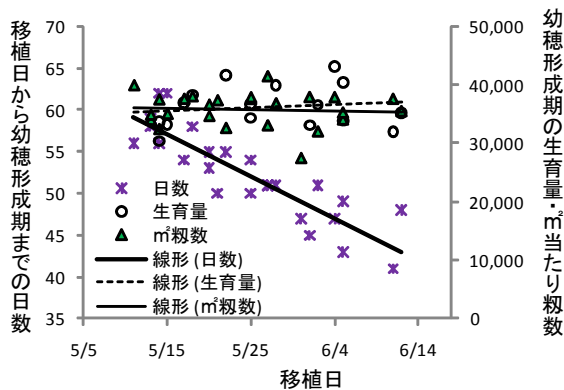


図2 移植日と移植日から幼穂形成期までの日数及び生育量、㎡当たり粒数

(平成16～22年 青森農林総研)

(注) 幼穂形成期の生育量は同日の草丈×㎡当たり茎数

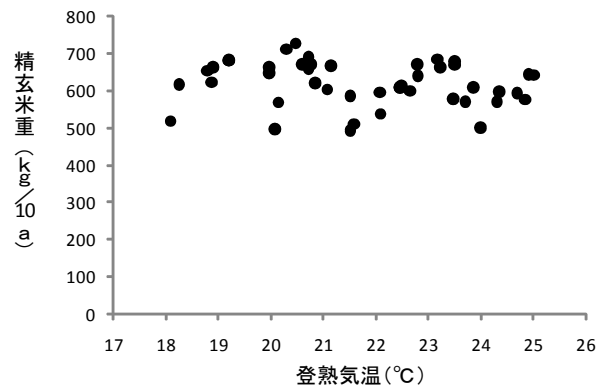


図3 登熟気温と精玄米重

(平成8年～22年 青森農林総研)

(注) 登熟気温は出穂後40日間の平均気温

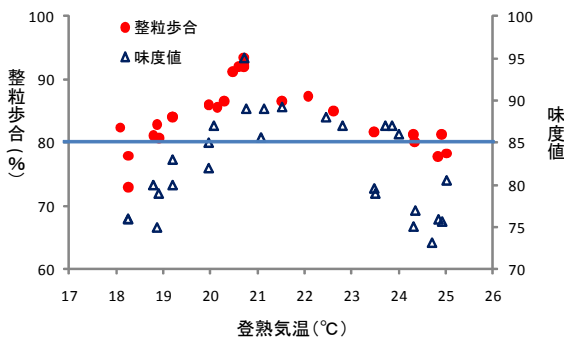


図4 登熟気温と整粒歩合、味度値（平成8～22年 青森農林総研）

(注) 整粒歩合はSATAKE RGQI20、味度値はトーヨー味度メーターによる測定値